

ジョン・アダムズ旧蔵プライス・コレクションについて
—— アダムズとプライス少考 ——

The Richard Price Collection originally formed by John Adams,
Second President of the United States, now housed in the Center
for Historical Social Science Literature,
Hitotsubashi University.

永井 義雄
NAGAI Yoshio

(1)

古典資料センターが所蔵するジョン・アダムズ旧蔵プライス・コレクションについて紹介を試みたい。アダムズ (John Adams, 1735-1826) は、アメリカ合衆国第2代大統領である。

収録作品を先ず、紹介しておこう。

プライスの著作 (13点) は、8冊に製本され、4冊が1つの美しい帙に入れられている。つまり、アダムズ旧蔵書は2つの帙からなっている。アダムズの愛蔵書に対する暖かい姿勢とプライスに対する高い敬意が伝わる。収録された書籍は以下のようなものである。(書名の前のローマ数字は巻数である。)

I *A review of the principal questions and difficulties in morals. Particularly those relating to the original of our ideas of virtue, its nature, foundation, reference to the deity, obligation, subject-matter, and sanctions.* London MDCCLVIII.

II *Four dissertations.*

I. On Providence.

II. On Prayer.

III. On the Reasons for expecting that virtuous Men shall meet after Death in a State of Happiness.

IV. On the Importance of Christianity, the Nature of Historical Evidence, and Miracles. The fourth edition, with additions. London MDCCLXXVII.

III *Two tracts on civil liberty, the war with America, and the debts and finances of the Kingdom: with a general introduction and supplement.* London MDCCLXXVIII.

Additional observations on the nature and value of civil liberty, and the war with America, also observations on schemes for raising money by public loans: an historical deduction and analysis of the national debt: and a brief account of the debts and resources of France, the third edition, with additions. London MDCCLXXVII.

Supplement to section III, part II, containing additional observations on schemes for raising money by public loans. (with a separate pagination)

IV *A sermon, delivered to a congregation of Protestant dissenters, at Hackney, on the 10th of February last, being the day appointed for a general fast, to which are added, remarks*

on a passage in the Bishop of London's Sermon on Ash-Wednesday, 1779, the third edition. London MDCCLXXIX.

A discourse addressed to a congregation at Hackney, on February 21, 1781. Being the day appointed for a public fast. London (1781).

An appeal to the public, on the subject of the national debt. A new edition. With an appendix, containing explanatory observations and tables: and an account of the present state of population in Norfolk. Also an additional preface. London MDCCLXXIV.

The state of the public debts and finances at signing the preliminary articles of peace in January 1783. With a plan for raising money by public loans, and for redeeming the public debts, the second edition. London MDCCLXXXIII.

An essay on the population of England, from the Revolution to the present time. With an appendix, containing remarks on the account of the population, trade, and resources of the Kingdom, in Mr. Eden's letters to Lord Carlisle, the second edition, with corrections and additions. London MDCCLXXX.

V *A free discussion of the doctrines of materialism, and philosophical necessity, in a correspondence between Dr. Price, and Dr. Priestley. To which are added, by Dr. Priestley, an introduction, explaining the nature of the controversy, and letters to several writers who have animadverted on his disquisitions relating to matter and spirit, or his treatise on necessity.* London MDCCLXXVIII.

VI *Observations on reversionary payments; on schemes for providing annuities for widows, and for persons in old age; on the method of calculating the values of assurances on lives; and on the national debt. To which are added, four essays on different subjects in the doctrine of life-annuities and political arithmetick, enlarged into two volumes by additional notes and essays, a collection of new tables, a history of the sinking fund, a state of the public debts in January 1783, and a postscript on the population of the Kingdom.* The fourth edition. Vol.I. London MDCCLXXXIII.

VII The same. Vol.II.

VIII *Observations on the importance of the American Revolution, and the means of making it a benefit to the world. To which is added, a letter from M. Turgot, late comptroller-general of the finances of France: with an appendix, containing a translation of the Will of M. Fortuné Ricard, lately published in France.* London MDCCLXXXV.

(2)

このコレクションは、プライス (Richard Price, 1723-91) の作品中、アメリカ関係の諸著作と対アメリカ戦争の戦費調達に関連しての財政問題の諸作品が中心であることが特色である。

第I巻の表紙裏、見開き左側に蔵書票がある。John Adamsとあり、Libertatem Amicitiam Retinebis et Fidem (あなたは自由と友情と信頼を大切にするであろう) と書かれている。そしてまた、タイトル・ページの見開き左側ページに書き込みがある。Caroline Amelia deWint from her Grandfather John Adams in his 87th year-1822 と読める。キャロライン・アメリカ・

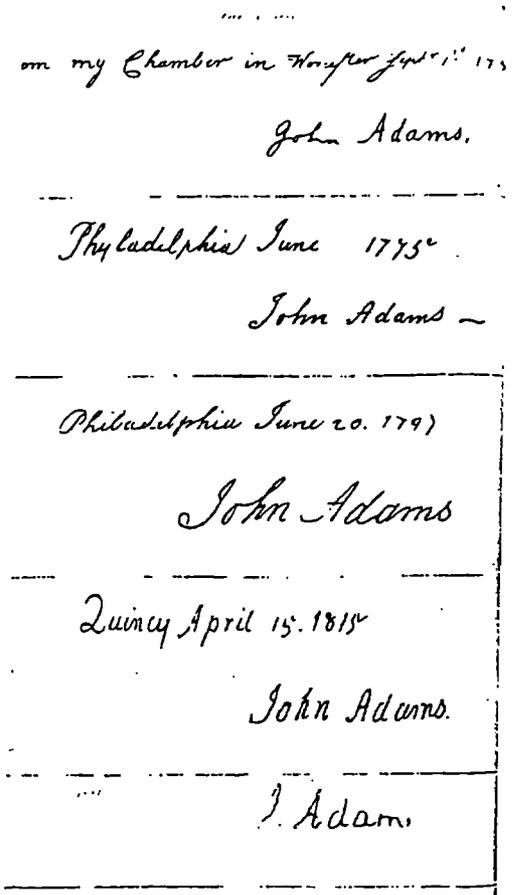
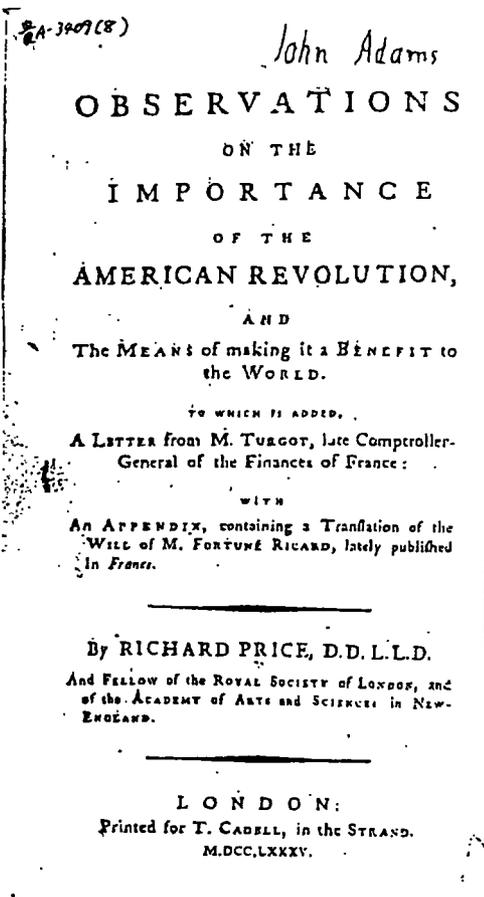
デウイントが1822年に87歳の祖父ジョン・アダムズから、このコレクション（あるいは第1巻をなすこの著作）を貰った旨のものである。

第II, III, VIII巻には、John Adams Smithの蔵書票がある。これには *Finis Coronat Opus*（終りよければすべてよし）と書かれている。

ジョン・アダムズ・スミスは、キャロラインの次兄である。この兄妹についてはすぐ後で述べる。

また、第八巻の fly leaf には T. John の署名がある。アダムズの家系にはこのような名前は見いだせなかった。これらのものが、辛うじてアダムズ以後のこのコレクションの歴史をうかがわせている。だから、今世紀初めに編まれたジョンの旧蔵書のカタログには、これらの書物およびパンフレットの記載はないのである。⁽¹⁾

また、第八巻の *The importance* には、John Adams のサインがあるが、これは、アダムズ自身のサインかと思われる。⁽²⁾（図版参照）



ジョン・アダムズ旧蔵ブライズ・コレクション中のジョン・アダムズの署名と思われるもの（右肩）

The Works of John Adams, vol. VII に掲載のジョン・アダムズの筆跡（一部）

書き込みは、あまりない。第I巻 (*A review*) の45ページ、.... what is more impossible, that for the imagination to represent to itself matter void of colour: という原文にアンダーラインがひかれて、そのマージンに書き込みがある。

I doubt the accuracy of this observation. Is a man born blind altogether deprived of Imagination ?

第III巻の8ページ(「こうして大きな国に自由な統治はうちたてられるであろう」という主旨の文章)のマージンに St. Pierre と書かれている。

第IV巻の第4パンフレット (*The state of the public debts....*) のタイトル・ページ右肩に「2」とインクで書かれている。

第VIII巻には、50, 52, 54, 62, 64の各ページに強調の鉛筆書きの側線がある。

書き込みは以上ですべてである。だれの手によるかは確認できない。

上の第IV巻第4パンフレットには、後に別に刊行された Postscript (pp.16) がある。

第VIおよびVII巻を占める *Reversionary payments* は、Earl of Shelburne 宛の献辞を持っている。

第VIII巻の *The importance of the American Revolution* は、第2版である。初版(1784年)も贈呈されたことがはっきりしている⁽³⁾けれども、このコレクションにはなぜか含まれていない。

ジョン・アダムズ・スミス (1788-*dunm* 1854) とキャロライン・アメリア・スミス (Caroline Amelia deWint, née Smith, 1795-1852) は、ジョン・アダムズの長女 (Abigail Smith, née Adams, 1765-1813) の次男と長女である。アブゲイルは同名の母の寵愛を受けていたから、ジョン・アダムズ・スミスは生まれたばかりの赤ん坊の頃から、祖母アブゲイルに可愛がられた。⁽⁴⁾ その妹、キャロラインは、「ピンク色の、小柄の可愛らしい子ども」で、ジョン・アダムズは、かれらの父、つまり義理の息子の「大言壮語癖」にうんざりしながらも、キャロラインを慈しんだ。長じて、スーザン・ボイルストン・アダムズ (Susan Boylston Adams, 1796-1846)、つまりジョン・アダムズの次男チャールズ (Charles Adams, 1770-1800) の娘が、体格は人並以上なのに精神はそれに追いつかないのに対して、同じ年頃のキャロライン・アメリア・スミスはそれと対照的に「物腰が柔らかく、気だてのやさしい……どこから見ても魅力的な」子どもであったし、スーザンがアブゲイルの頭痛の種であったのに対して、キャロラインは訪れるのが待たれる存在であった。

兄ジョン・アダムズ・スミスは、第6代アメリカ合衆国大統領となる叔父ジョン・クインシー・アダムズ (John Quincy Adams, 1769-1848) の秘書を務めた (1815-19) りした後、ハミルトンの近くで弁護士もし、郵便局経営もした人物である。キャロライン・アメリア・スミスは、1814年秋、ジョン・ピーター・デウイント (John Peter deWint, 1786-1870) と結婚した。デウイントは、キャロラインの長兄ウィリアム (William Steuben Adams, 1787-1850) とコロンビア大学の同級生であった。「控え目でもものよく分かった、裕福な」夫であった。婚約を聞いて、ジョン・アダムズはデウイントに真情溢れる手紙を送り、デウイントの沢山の姉妹たちに「わたしの優しい、わたしのよく気の付く、わたしの可愛いキャロライン」をどうかくれぐれもよろしくと言ってほしい旨を書いた。この結婚によって、二人の間には12人が生まれる。最初の子の誕生日は、デウイントとジョン・アダムズ、つまりその子からすれば父と曾祖父と全く同

じ日（10月19日）であった。キャロライン・エリザベスと名づけられたこの子は、このことも手伝ってか、あるいは、最初に見る曾孫だったという理由でか、曾祖父夫妻に來訪を歓迎された。⁶⁵ もちろん、デウイント夫妻はそれから生まれる曾孫を伴って、アダムズを慰めに訪れた。1818年には、アダムズは最愛の妻アブゲイル（Abigail Adams, née Smith, 1744-1818）を失うのである。

アダムズの所有したリチャード・プライスのコレクションは、こういう状況の中でキャロライン・アメリア・デウイントに贈られ、かの女が船の転覆事故でハドソン河で水死した後、次兄ジョン・アダムズ・スミスに渡ったもののように思われる。この次兄は結婚せず、係累を残さなかった。

注

- (1) Boston Library (ed.), *A catalogue of the library of John Adams*, 1917. Ms. Roberta Zonghi (Boston Public Library) によれば、*Deeds and other documents relating to the several pieces of land and to the library presented to the Town of Quincy by President Adams together with a catalog of the books*, 1823. にすでに、プライスの書物の記載はないとのことである。
- (2) *The works of John Adams*, vol. VII, Boston 1865 には、この点を確認できる自筆コピーがある。（図版参照）このパンフレットを贈ったはずのプライスの筆跡ではないように思われる。わたしは、プライスの筆跡をシェルバーン文書（ミシガン大学 W. L. クリメンズ図書館）や、デイヴィッド・ウィリアムズ図書館（ロンドン）で見ている。念のため、*The correspondence of Richard Price*, 3 vols. を共同編集したデイヴィッド・O・トマス博士にゼロックス・コピーを送って確かめたところ、プライスではないという回答を得ている。
- (3) John Adams to R. Price, in *The correspondence of Richard Price*, vol.2. edited by D. O. Thomas, Durham and Cardiff 1991, pp.271-2. 次節参照。
- (4) Page Smith, *John Adams*, vol.2 (1784-1826), p.741, 772, 784, 810. アブゲイルは孫たちをひとしなみに可愛がったから、ジョン・アダムズ・スミスだけが寵愛を独占したわけではないが、ジョン・アダムズ・スミスは、「利発な、人を引き付ける子ども」だったと言う。Cf., *Ibid.*, p.808. 祖父ジョン・アダムズがジョン・アダムズ・スミスをその兄ウィリアムとともに愛したことについては、Cf., *Ibid.*, p.870.
- (5) 「アダムズの最大の楽しみの一つは、キャロラインとジョン・ピーター・デウイントの訪問であった。」それまでゆうに1週間はかかっていたボストンとニューヨークとの旅は、1816年には、新しい蒸気船によって48時間に短縮された。Cf., *Ibid.*, p.1119.

(3)

アダムズとプライスとの交友は、アメリカ革命の過程で生じた。そもそもは、プライスのアメリカ革命擁護に感謝して、独立13州の連邦会議がプライスに「合衆国の市民となり財政規則の作成に助力を与えてもらうよう要請する」旨の決議を行って、このことをプライスに伝えるよう、ベンジャミン・フランクリン、アーサー・リーおよびジョン・アダムズに命じた（1778年10月6日）ことに始まる。この決議は、もしプライスが家族とともにアメリカに移住するならば、移住費用と住居を提供することを付記していた。3名の書簡は、同年12月7日パリから

発信された。⁽¹⁾ その後、アダムズは1783年のパリ条約でブリテンがアメリカ独立を承認した後の初代アメリカ大使としてブリテンに駐在した。この時、二人の交友は親密になった。アダムズはジェファースン宛の手紙の中で「わたしは、イングランドにいた1785年から1788年までプライス博士とは親密でした」⁽²⁾ と書いている。プライスの側でも、共通の友人ジェファースンに「アダムズ氏の会話と友情を非常に嬉しく思っています」と書き送っている。⁽³⁾ アダムズ家は、滞英中ハクニのプライスの集会によく出席した。妻アブゲイルは「もし命あってアメリカに帰ったら、プライスの説教が聴けないのを残念に思うでしょう。……わたしはかれの性格を尊敬し、人となり愛しています。かれの言葉は心の底から出ています」と、書いている。⁽⁴⁾

かなり時間をおいて次に書かれた手紙はアダムズからプライス宛てのものであった（1785年4月8日）。やはりパリからである。フランクリンを通じてプライスの『アメリカ革命の重要性の考察（*Observations on the importance of the American Revolution*, London 1784, 2nd ed. 1785）』の初版と再版の両方を受け取ったお礼が主な眼目である。「それら〔パンフレット〕は統治と商業との領域における真面目な真理の探求と言えます」と、「アメリカ市民の賞賛の声」を代表しながら、アダムズは、感謝とともに書き送った。そして、「われわれは良心を自由にすることから始めるべきだというあなたに完全に同意」し、「道徳と所有に適合するあらゆる宗教ならばそれを信ずるすべての人が等しい自由、所有あるいは所有の安全を享受し、栄誉と権力を得るのに等しい機会に恵まれるならば、また統治には政策あるいは科学（Arts or Sciences）のほかにはいかなる不可解なもの、あるいは神秘的なものもないと考えられる時、人間性と社会状態の向上が望めると期待していいでしょう」⁽⁵⁾ と、プライスの議論に対してほぼ完全な同感を示した。しかし、この第2版が問題であった。

上の原タイトルに明らかなように、第2版にはチュルゴのプライス宛の書簡が追加された。この書簡はアメリカの政治体制に対する批判を含んでいた。アダムズは、この批判からアメリカ体制を擁護しようとしたのである。それが、アダムズの最大の主著となった。

A defence of the constitutions of government of the United States of America against the attack of M. Turgot, in his letter to Dr. Price, dated the twenty-second of March 1778, 3 vols., London 1787.

それからまたかなりたって、プライスは新しいパンフレットをアダムズに送った。本コレクション第IV巻にある *A discourse addressed to a Congregation at Hackney on February 21, 1781, being the day appointed for a public fast*, London 1781. である。このパンフレットは、1776年の対アメリカ戦争反対の政治的発言をしたことに対する弁明であった。このパンフレットに添えられたプライスのアダムズ宛ての手紙（1781年3月19日）は、「アメリカとの仲たがいをいつも批判してきましたので、わたくしは今では自分で驚くようなふうに関係に引きずられて政治にのめり込みました」と書いている。このパンフレットと手紙とは、後のフランス革命時のパークの批判に対してあらかじめ答えるものとなっていることに注意しておきたい。そして、プライスは政治的発言を「しかし全体としてはわたくしは満足しています」と総括している点をも記憶しておきたい。

そしてこの手紙の末尾でプライスは、『生残支払の考察』第4版の準備をしていることを伝える。本コレクションの第VI巻、第VII巻を占める大冊である。

注

- (1) B. Franklin, Arthur Lee and J. Adams to R. Price, in *The correspondence of Richard Price*, vol.2, pp.29-30.

リーは別に単独でもプライス宛てに手紙を送り、連邦議会の決議を受け入れてくれるよう要請した。「あなたが居られる所では、あなたの助力は必要とされているとは思えません」と、後に『祖国愛について』なる論説を書くプライスに対して、リーは訴えた。プライスは3名に対して、謝絶の手紙を丁寧に書いた。「わたくしはそのような助力をしてさしあげる力を充分に持ってはいませんし、それにこの国に強く結びついていますし、また急速に人生の晩年に向かってもいますから、移住など考えられません。」(1779年1月18日)

同じ日付のリー宛ての長い手紙の中では、「歳をとるにつれてわたくしは怠惰になっており、おそらくそのためわたくしは公けの仕事は出来なくなっています」とプライスは書いている。ちなみにプライスはこの時、55歳である。そして誰しもブリストリのアメリカ移住が対照的に思い起こされるであろう。

もっとも、プライスとフランクリンとの交友はこれ以前から始まっている。両者の書簡の最初は、1766年12月15日のプライスからフランクリン宛であった。Cf. Price to Franklin, in *The correspondence of Richard Price*, vol.1, edited by D.O. Thomas and W. Bernard Peach, Durham and Cardiff 1983, pp.41-2.

- (2) J. Adams to T. Jefferson, 14 Sept. 1813, in *The works of John Adams, Second President of the United States of America: with a life of the author, notes and illustrations, by his grandson Charles Francis Adams*, vol.X, Boston 1856, p.68.
- (3) R. Price to T. Jefferson, Oct. 24th 1785, in *The correspondence of Richard Price*, vol.2, edited by D.O. Thomas, Durham and Cardiff 1991, p.314.
- (4) *The Adams papers*, ed. L. H. Butterfield, Cambridge, Mass., 1961, III, pp.212ff. Cf. *New Letters of Abigail Adams, 1788-1801*, ed. Stewart Mitchell, Boston 1947, p.53. Adams to Price, 20 May 1789, in *The correspondence of Richard Price*, vol.3, pp.225-8.
- (5) John Adams to R. Price, April 8th, 1785, in *The correspondence of Richard Price*, vol.2. pp. 271-2.

(4)

アダムズは、ジョン・C・カルフーン (John Caldwell Calhoun, 1782-1850) とともに、アメリカの共和主義的保守派にして、政治の理論と実践とに足跡を残した代表的人物である。アダムズの主著は、*Defence* であろう。あるいは、それに加えてこの *Defence* の第四巻とかれ自身が考えた *Discourses on Davila* を挙げることも出来よう。*Defence* を執筆、刊行した時、アダムズは、上記のようにブリテンにいた。

Defence がチュルゴ批判であることは、既にかいたが、じつはアダムズはチュルゴの見解をかなり以前から知っていた。「私は、フランスに着いた1780年に、自分が起草したマサチューセッツ会議大委員会報告の印刷された1部を持参しました。これは議論の対象になりました。チュルゴ氏、ラ・ロシュフーコー公爵そしてコンドルセ氏その他の人々はフランクリン氏の憲法を褒めそやし、私の憲法を批判しました。」⁽¹⁾ 1778年のチュルゴのプライス宛書簡は、1784年

に公表されたけれども、アダムズは、チュルゴの見解を1780年にはフランスで実地に知ったし（ひょっとすると1778年に渡仏の際に既に知ったかもしれない）、しかもそれがチュルゴだけの見解にとどまらないことも知っていたのである。

アダムズの見解は、原理的には、単純明快である。「権力は、制約されず均衡が取られないときは必ず乱用される。」⁽²⁾ この原理に立ってアダムズは、「立法権を3部門に分け、行政権を立法権と分け、司法権を両者と分け」た。しかし、アダムズの理論は、完全に実際に移されたわけではない。「この3冊本は合衆国の憲法とはなんの関係ありません。それは存在していませんでした。」ところが、チュルゴたちは、単一の中央集権政府をよしとし、アダムズ的な憲法をブリテンの単なる模倣と見たのである。⁽³⁾ こうした見解が、アメリカ自体のなかにもなかったわけではない。こうしたことが、アダムズにチュルゴ批判を書かせることとなった。この三権分立論に立って、アダムズは、チュルゴを「真の自由な統治構造を著しく誤り考えている」ときびしく批判した。要するに、アメリカとフランスとの政治理論的常識の対立、地方分権と中央集権、3権分立と権力集中との対立であったが、市民の政治的成熟の問題もからんでいたであろう。啓蒙の段階を越えていたか、まだその段階にあったかという問題である。

あまり注目されないけれども、アダムズには次のような興味ある発言がある。統治形態の問題の底には、人間観の問題があると言うのである。「諸君も私も、蜂の寓話よりトリストラム・シャンディのほうを評価し、ホップズよりはバトラーのほうに同意する。心の欲深い横柄よりはむしろ弱さこそが、人間を無制限の権力を託すにふさわしくなくする。」ところが、「あらゆる情念には限界がない。」情念は拘束すれば、萎えてしまう。しかし、情念は不可欠の重要性を有する。金銭欲、名誉欲、権力欲がそうである。この矛盾を解決するのが、均衡論である。「ひとは、内心においては理性と良心の支配のもとで愛情と欲求との均衡をはかり、外面においては権力の均衡に努めるべきである。」⁽⁴⁾ これは既に、ベンサムの世界である。そうだとすれば、アダムズとチュルゴとの対立は、アングロ・アメリカ的政治常識とフランス啓蒙との対立であったと理解できるであろう。

なお、アダムズは、*Defence*の中で政治思想的考察を行い、その中でプライスを論じているし、*Works*, vol. I に収められた書簡26でもプライスの市民的自由の観念を論じているが、内容に立ち入る余裕はない。

注

(1) John Adams to Samuel Perley, 19 June 1809, *The works of John Adams*, vol. IX, p. 623.

なお、アダムズの政治的立場はすでに1773年の「マサチューセッツ湾州」のイギリス総督と州議会側との論争のなかで確立しつつあった。Cf., *The briefs of the American Revolution*, NY and London 1981, passim. なお、この直前の1760-69年にマサチューセッツ湾州総督であり、やはりボストン市民と相容れなかったのが、サー・フランシス・バーナード (Sir Francis Bernard, 1750-1818) である。バーナードについては、わたくしの『ロバート・オウエンと近代社会主義』(ミネルヴァ書房, 1993年) 165-6 ページ参照。

(2) *Defence*, in *The works*, vol. VI, p. 73.

(3) 「イングランドの習慣が、アメリカのさまざまな州のほとんどでなんの特定の動機もなく模倣されています。それら州は、これらさまざまな権力の均衡をとろうと努めています。イングランドでは、この均衡は、国王の巨大な影響力に対しては必要な抑止力でしょうけれども、すべての市民の平等の

上に作られた共和国でもまるでなんらかの役に立つかのように、そう努めているのです。」 Turgot à Price, 22 mars 1778, in *The correspondence of Richard Price*, vol.II, pp.4-5.

(4) *Defence*, in *The works*, vol.IV, pp.406-7.

(5)

ロンドンの古書店 C. R. Johnson 社が、リチャード・プライスの著作オリジナル55点、関連する同時代の著作オリジナル55点、計110点のカatalogをわたくし宛に送ってきたのは、1993年7月であった。金額にして5万5千ポンドであった。古典資料センターの5年を越える予算をもってしなければ、当時の円高の為替レートをもってしても全部を購入することは不可能であった。すでにセンターと図書館が所蔵するものとダブルものもあったから、すべてを購入する必要はなかったとはいえ、なかなか垂涎的たるべきものであった。このなかに、アメリカ合衆国第2代大統領ジョン・アダムズの蔵書があった。わたくしは、分売してくれることを確かめて、アダムズ・コレクションを含むプライスの原作品の1部を、わたくしの停年までの全残任期間の2年分のセンター予算をつぎ込んで購入することとした。助手の岩本君がその間、予算無しになることを快く了承してくれたのが有難かった。

C. R. Johnson 社のクリス・ジョンソン氏によれば、同社がジョン・アダムズ旧蔵書を購入したのは、ニュー・ヨークの古書店(グレン・ホロヴィツ氏)からであり、その先はどうやら、ニュー・ヨークのオークションだったらしい。プライス・コレクションがアダムズ家を何時、どのようにして離れたか、それからオークション会場に来るまでどのような運命を辿ったかは、上述のいくつかの手がかりから推定する以外には、あまり定かではない。

なお、C. R. Johnson 社のカATALOG中、本古典資料センターが購入出来なかったプライス関連図書は、かなりのものを、文部省の助成を得て中央大学が購入している。

I am most grateful to Ms. Roberta Zonghi (Boston Public Library), Mr. Jonathan D. Galli (New England Historic Genealogical Society) and Ms. Miho Yoneyama (Tokyo Woman's Christian University) for their kind and useful suggestions and informations.

(関東学院大学経済学部教授)